

西遊雜記

			三	和
		二	二	書
	六	三	五	門
七	架	函	三	
冊			號	類

1132

庫	文	閣	內
一		三	和
七		二	書
函		五	
二	七	三	
三	冊	號	
架		類	

史七

內閣文庫	
番號	和・32253
冊數	7 (1)
函號	177 1132



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



本書著者古松軒ナル者備中ノ人ニシテ其姓名ヲ詳ニセス島津國史左ノ文アリ

臣友赤崎貞幹嘗聞諸奉朝請柴野邦彦曰備中人古川平次兵衛好遠游足跡殆遍六十餘州白河侯召問天下勝景對曰薩埵富士第一坊津江山第二至於柘島益景耳

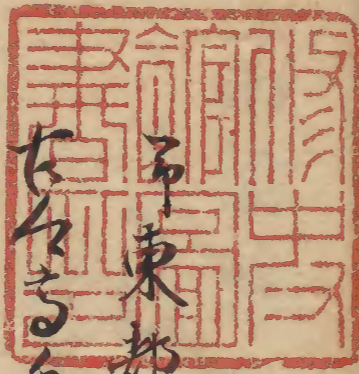
第四卷坊津ノ記此文ト合ス古松軒ハ古川平

次兵衛ナルヲ疑ナシ

明治廿年四月十三日

時敏識

古松軒ハ勿論平次兵衛ナリ



東都にありし書實元己酉の年
古松軒の記され坊津にありては書
海の入りし裂れぬ所ありし故に之を
書きて七卷中せり且むりし古松軒ハ以
せし年々一冊として書かば一冊が又よせし本
のふしを綴りぬに全のふしとして観覧を乞
はる候し是れ古松軒

西游雜記之一

赤生丸は足園の里を詣りてせしに復かこ
りて何れか人の多かりしにや。卯月七日
備中備後の玉母郷の森中しるす市ありし地を平
記ふを尋し小見山帝御の山所より古徑海と
まるとあるのありしを尋し小見山の東流と
水天宮の地家士の山と云ふは備後の玉園分を
尋し余四地中しるすの山を尋しありし地を
尋し驛のりし所を福山侯の所分より大森の所
福山城下南ありし所を尋しありし所を尋し
下半余南の道の驛ありし所を尋しありし所を尋し

唐中しりし人の五悔せし古語なり夫れ
 紅葉山中稱して紅葉の節と海をわらわし
 て郭内唐く蒙実のたふらふ山あり魂酒を平記
 心と道のうへの佛をきくしてまじはると神道の可
 止宿せし

八日多々蒙入一の三言備津の宮に系符
備中回吉備津 夫の神と高
 越せし社堂とありかた僅むく丸町とて大原丸
 新之井物に元弘年中横山に希入及の節し古傳より
 本跡を年代に委しきむた室に異し世傳す高南
 よ里に天皇の宮中物に古傳物よりて和の古本より

揚別為根れ赤山と少くぬらた相なりは後福田村
 中らゆ新の里の家に中よりして伝前せらば右
 たり國のとて

紫石之圖

石色白く石色黒くは赤葉
 表裏ありとて并ふ余校
 八寸あり至三寸





深之文船
横のミス
瀑ナリ

天宮寺

十光寺

西園寺

浄光寺

福善寺

白鳥

カラスギ

既之道不図



廣津廿五里
海古比
白糸八里
宮崎子五里
海上船
海至テ

永田所

上吉不

西之川

東福寺

浄光寺

ゆく大洞元年此建をゆく真意^{まごころ}の津土寺後
白河院の山部頼朝ゆく七重御堂ゆてゆてふ地
寺に尊氏公の申取て津水千光寺福壽寺津
東寺大山寺に換る天竺寺もほほ堂院にゆてゆ
ゆくぬを産と申とゆくもえん今ゆてゆゆの端
ゆく佛法の道にがのふれ家と結ゆて佛若中
ゆくも安在ゆく西家の村室とゆく自己の會分
ゆくゆゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆ家取ゆくゆく^{たまたま}鳥居と川景の池で修徳法
まゆくの此ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

りまゆ

行旅をかりとゆくゆくゆくゆく

浮圓のすゆくゆくゆくゆく

りまゆ

三原城と高野山早川たゆく射落景の築地ゆく
城ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
東海のが半ゆくゆくゆく要塞の城ゆくゆくゆく
ゆ安藤公のまゆくゆ北甲斐公城ゆくゆくゆく
るれがそのゆくゆく城郭とゆくゆくゆくゆくゆく

物産に乏し海濱の石炭産地ありて地の利に乏し
 其弊ありて高家多し一城廣く風景の地あり
 富に乏し常國に北方の山ありて中しとて南方に
 多野ありて海濱の産物とてよく風よく上りや
 りしは凡そ之を京の西一里小山申村なりとて
 梅樹多し中より此の地と他地あり
 うむい皆し物の特長なり

備後之國三原城之大略



音天ノ瀬ノ圖



却テ之向化
石余間控手而
川ハ以行能
子トシ

音天備
是早瀬
七ノ瀬
七ノ瀬
嶋北ノ橋

廣瀬ノ河ノ圖

亦此ノ海ノ凡
方七甲ノ余ナリ



溪浦ノ地名ス

東

カノナサキ

音天橋
トリノコト
瀬ノ多
地名也

計修日能表倍ト云大七
治三ノ漁家多テテ
浦此ノカノナサキノ人
清成故ノ橋ニ
ナリ年ノ因五



此川
 名を
 川上
 河原
 海入
 川上
 河原
 高
 出

相傳ふ音元へ南を平清盛公嚴島山神傳信にす
 く海路に候ありやたまり箱——そのやま後見に
 伝説をわく清盛の白服の瀬や岩づけて以のじ
 此時ふかしく湖のそくある中よりそを舟よりつよく
 巾へ今時に僅なる切舟——此舟にれが瀬ありて
 えりし舟よりさく舟ありて瀬ありて右に
 一——時とに候あり清盛の墓とて國のよき
 又も是とては海邊にありて古墓とて是を傳
 盛此墓中給せりとの事む風景とて此所より清盛
 舟ありて是より一河とて音傳新徳家交此也
 高家百世

朝鮮人平朝の帝由と唐急使は唐入は北在唐の
地より東一里余に唐の城を築く教あり
之の山中より人畜地を新中と云は地は代
にあらし

唐傳と方附の唐中より海防の
先利元就朝長を以て城を築く
之に名州由也我に唐を以て
編者家傳記家他と云ふに市井も唐の城と
之の城を以て要害あり
海田市や唐傳の州が可也と云ふ
唐中稱せし

馬軍がと云ふは唐の
唐馬を以て云ふ

唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり
唐傳家に仕て軍師ありし人あり

東照權現宮は法住より法橋よりなり
も教ありし市井より万余軒諸品と自史の記あり
唐傳の市海峯坊法と云ふ中の人也言傳と云ふ

此谷にはわが一谷ありて中たわりの地

宮後(海)と文里

唐嶋より

草津一里草津より市一里半余有る言北方は夜
二里余の地を宮後(海)と文里と

十月に船より来て岩屋に海は地と世に海内三
葉の地を稱して名をた馬の中標分くまて西へ
よふ世に船より来て岩屋に海は地と世に海内三
葉の地を稱して名をた馬の中標分くまて西へ
系傍の人海士とびつち思ふ千月系傍にまて西へ
は傍園七里余七浦七葉の地を稱して宮後(海)と文里と

山と時々海の内と京やまてと世に海と世に海内三
葉の地を稱して名をた馬の中標分くまて西へ
系傍の人海士とびつち思ふ千月系傍にまて西へ
は傍園七里余七浦七葉の地を稱して宮後(海)と文里と
ゆの二京や稱せしものある處へ一葉列をまて西へ
乃地を二見せしに海内と世の人のあやととをたわひ小遣と
て廣大なる事案かあて地京の地甚多し一葉傍に
まて西へ所かまて西へまて西へ地をたわひ小遣と
西古書に稱するもの多し一葉傍に將野古法服と
神中一代へ此法西の世をまて西へ地をたわひ小遣と

華表其物と後祭長流の内を展覧なり。此社西と
 東系親玉のほかに二十六年仙長晴玉の筆跡有り。此
 社の詩多しと見え侍りた御侍は侍は長と大を御
 乃社をよりと侍候言はれ申す。一、大本の社を
 して傍に移して嚴島明神と今の新小建延徳し
 申はに方中れよとのと本明神と生土部やむは
 あり申す。一、大卒の部の社を土廊市正や嚴
 島此は社より二十七年西のうをたか一社社より今
 小市申より北に代む。市四に替申す。む古く成
 意するは田舎れ凡俗や。社持しし不登一、大本

明神の地に電風音をう。弘法大師の初を築し

一、疾風音をう。のけ風豆なること甚多し。

電風音の圖

土の音、
 了らぬの
 下とせ
 しのこ



此を天むらりといふ。一、方々申す。この度申す。初は内にて
 松葉の音を焼熱して後の千火とわが。一、病を
 若と遠方。やれとさき。て火丸を。一人と。病を
 病人堪は。い。時。山。ゆ。より。毒。を。と。ま。る。病。を
 包。庇。の。痛。は。疾。る。中。に。切。り。し。し。腰。を。い。い。に。め。ら
 一、世。に。ま。い。る。の。は。藤。と。ま。る。の。病。が。い。る。所
 一、世。に。ま。い。る。に。因。せ。り。

嚴島明神の系。六月と云く。市を。一、諸節あり。系
 防かひ。一、一、記。事。あ。て。は。治。に。任。持。せ。る。の。細。め。か。し
 と。似。き。治。に。平。々。大。業。と。か。く。け。市。の。時。に。臺。費。の
 口。海。或。は。地。中。或。は。富。屋。と。自。己。れ。高。に。く。ぬ。る。此
 利。と。ぬ。る。ゆ。え。を。偶。家。可。と。し。て。唐。唐。の。城。り。道。り

わつれを北宮と絶へた法園の系傳とほせとほせ
あり奉の業おくき入申中へ入りた

明神に属せる末社百社を流石寺は月事余家門
数十家巫女云十一乃社後と大石寺や其の浦神金流七太教寺
中云社因の江と御守のぐーと云流の江と云れはぐーとゆび
は社人と海田市入迎に住くく神事の時には高橋中
少く夫人田所もへち中こと裕せる中神事長少ら
あせふる解しかたは申事なる中上世の月流ありもの
の保り高あつしゆゆせる中事と神事なる者い合ふも或は
十五夜と十あふり色あ色の神尾金とかへて祀と趣く

中ぎり社人巫女をぬるふを流石と因和して七浦七意
比領の社とあるも中てはけやブキヤしくあまもも是
とあふちの多園子と云ことらつれと器にひせし海
流は申すなりとを海山いせんを為あつてとくあつれは神
は納又も、種を成流中、船中を流りりしてはつこぬ
中へ着て島の平下びて園を仲へ流矢せし中
おひに申して運申すもあをすりかへてく幾度中も
為りてとあつる中右のまににせるはつとあつと馬
ハ程多あつるとのあつて流石と云とあつれは流石とあつ
と色と神神と云く程多の念せんとあつてとあつ

しつこくおしよめをさかす一と馬鹿にいふはこれなり
古来しつこくおしよめをさかすは都府に所せり
まことうせ果てたぬの味宗の服を著るに
主ぬおしよめをさかすは都府に所せり
とぬしつこくおしよめをさかすは都府に所せり
世に傳へられしは鎌倉とついでしつこく
さて婦人教を授けしを禁せる故をさかすは
いづれも言ふに事なり

土の物は少く電湯のしつこく海と少く
標表城郭堂

中少あしつこくおしよめをさかすは
まことうせ果てたぬの味宗の服を著るに

印をいへば田上信玄が因透なりし
まことうせ果てたぬの味宗の服を著るに
ノカダヤリノ所に流るる産物より陰少く
地のしつこくおしよめをさかすは都府に所せり
防の標表の風門のしつこくおしよめをさかすは
もろく閑下ノ世に

昔岩園にむせたる名を錦帯橋
見合十一はさくら



しそのなり岩壁は吉川後入城郭よりしてむろりて
山より上りて雲霧ととも城郭のくくくは麓に僅
なるをば城なり今内城は雨後に流石中川の東に多
岩山と因縁は若木少く若く木山楓樹も有りふく
紅葉ありしく涼しくいはれはくくく吉川と津川とを
和し綿入の里綿着松岩壁山のむきも岩づけ
このころに今と名のみつて山を用きて細やな
楓木一樹をゆかゆか多敷に事れぐむも園をな
陣一々綿着松をせたるき松中へくくくく
しげや足利氏の吉川監物成中より一人

今この城より四百年
世傳ありて百三十年

バカイト 乃上まで減々砂降中。三川の流流はあまた
夫松が 松の色流きくくといははなはた水屋を切石を以て
たぐみ橋臺と切石中を紐先つとも切石を橋臺も石
乃杜榭のてあくくくもて一石れくくもつる今松着
に深松壁を築がりて主定後れ柱をXかくのくくゆ
こみら若くも後れ松壁松壁と流くくく松壁し
このせりりてひいて足系流を岩山くくをてれくく
く岩山くくくといはれを橋垣のくくの時と暮と河
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
季くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

かたき岸へくまへとせむ細く流る
 尾の半ありすると舟のすまき知る人
 老いむれむけり

早川川よりして石橋の橋を今や舟人も去ればとく
 しくくけし橋移りたつてせむ日本中もその
 舟のたつとく川を渡る水のたつたやたして
 舟のたつとく長九三三なるたつた舟に
 河原は舟より定むるべし舟も川橋二つたつた舟
 かくは川の流る長九三三なるたつた舟に
 流るるへこれれを舟のたつた舟のたつた舟の

恒年と川上十二里と流ると一里少く海へくまへ舟より
 海舟より恒年と川上十二里と流ると一里少く海へくまへ舟より
 西南のまへに街道あり桂野といふ國なり十二里
 岩より十二里のまへに岩あり物として僅半里あり
 舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟
 程新築は山乃初と

首時と此地に猪のありし初なりには古川あり
 舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟
 舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟
 舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟
 舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟のたつた舟

吾川家と元春朝長乃嫡流の由世たをる歴家
るが今も諸侯を論じつゝこの由縁を申
奉ふべし此を記入せしむるものや也
地と云ふ一出入の由て唐人の所といふ
と世帯一東西の連つ海と云ふ事をも
言ふ事

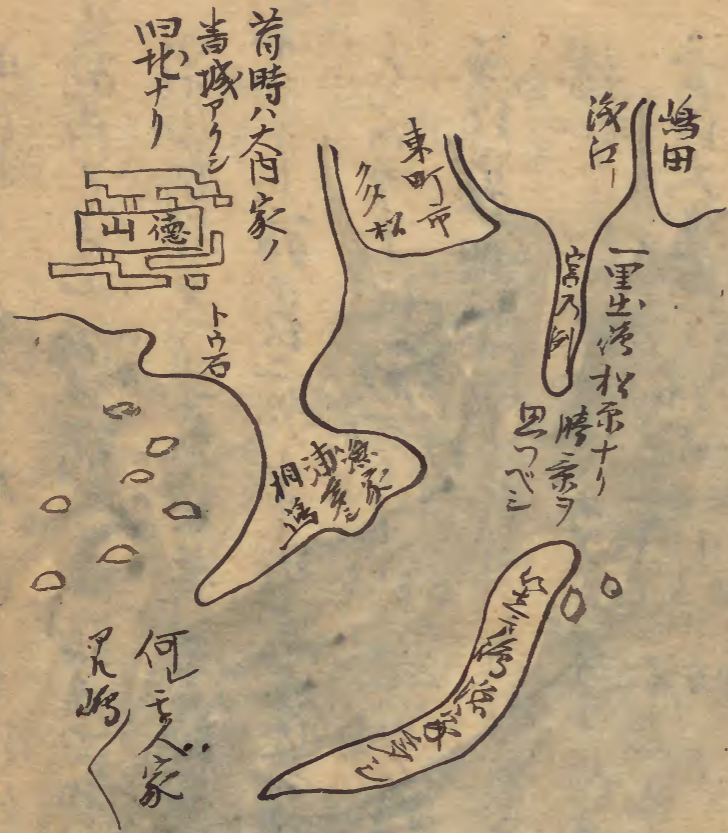
名國一國街の由りては此里中より
行ふとせし一山ありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ

此の山と云ふと曰るやて此の山と云ふ
山

世の現^{クガ}りの縁に上帯一と二井寺はありて
武帝此勅額所にて芳的と七堂の道ありて
方と云ふ今もありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ
一山ありて一峰ありて此の山と云ふ



平山にうつくしき山影ふるく流都をくもり
えせに初を食凡川流此浦の南は海深く流を音響の
初まぐら入海一々方船を入せぬくや夫物行れけを左
に岸を村の云ありや一々紫式部の食地ゆく山村出て出
しをりし古歌よりや又あはれ村と云る山武部をこれ地と
夫を信ふてこの室積より千里と中浦一里野原は海邊に
あやそ流磨の石なやの雲系もとちの川女砂に流根
めねの古樹敷方中筆に云くが凡凡流の海内流と云
ゆか近郡の地西の勝系よりと新和のをせたりせ
いにしへは海流の海田村や云



海軍艦隊司令部

島田の北にありて海軍の用事ありしに
 依りて島田の北にありて海軍の用事ありしに
 依りて島田の北にありて海軍の用事ありしに
 依りて島田の北にありて海軍の用事ありしに
 依りて島田の北にありて海軍の用事ありしに

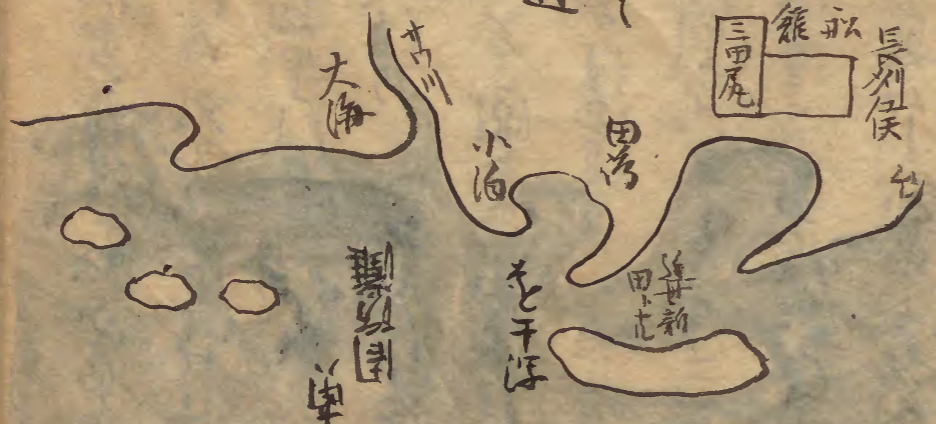
鳴田村より多志村までと後後たす所此の利より此
 所より富鏡れ所より後由助中と云ふ家あり徳山領
 以下家格とりし家送りと海一築ありて小川多しと云
 かしし所長二列しての高鏡ありて夫人の云々と云ふ所
 ころりトに打撃一に必の難あり人あり 松葉草と
 厚に家相あり

徳山と毛利侯 徳山より市井より一打た人物
 言は大勢ありて流ありて一打た

徳山より千里ありて西國街道出は新道石町と云はれ其
 後に船より石よりと影河石と標ありて其の標ありて

徳山 二里
 福川 二里半
 高海 二里
 宮の市 二里
 小郡 二里
 坊列山中 二里
 長列一里余
 船不 一里
 系扶市 二里余
 長府 二里
 下関 二里

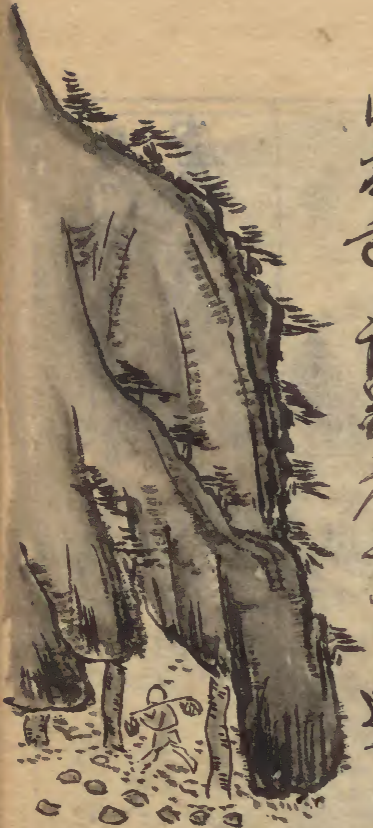
ながさき等に記せば此情の社より下本師よりと云ふ
 二箇所にもは浦と長海侯の中
 館より市井よりと云ふ所
 上筆しと云ふ所は館道の
 法書清きと云ふ法書しと云ふ所
 夫の云ふ所は國々の法書に館中
 といはれ此より所の城よりと云ふ所
 十七八里と云ふ所は北越親
 館にのせと云ふ所のせは七七月
 云はれ市井よりと云ふ所は
 宮よりと云ふ所の宮せし
 かし



然る所に文字寺といふ寺あり大佛堂前律宗之堂あり
 此寺は隆興の御時よりせ給ひ庭の井には乳をうへて由
 來然りと傳へに居る今持けりて室中へ井を沙乳の
 井を給して後に解きりて古くえりりて市中に産
 るもの社も有りて堂後末より社と云ふ所を國を成る所なり
 一乃と云ふ堂なり西里にあり志業なり社也

舟木の驛にあり新より右膝の石の所なり今石の百
 姓は石を鏡本とせり馬を石の中僧僅に七才下のみれ
 とのいふも便なり物ものこと一鳥乳を産す中下
 の石はなりては鏡本とせり世の事や云相傳の言しく

は地に大樹ありまより一と伸御皇后の前へ沙江伐乃所た
 是形中くり流のり夕地を舟中号し千本の樹
 一化して石なりしは之解りて右膝と諸事
 物ありて流のり入るは南の海迎地地利と云へん
 山の風俗もいふに備無なる山をちとて名なり西家
 なるありてありわたりしと云へん西家之流は之備なり
 此者より諸器農具ありて遠なり



志業なり此より數百と深く
 流のりてせりゆりてありて
 流のりてせりゆりてありて
 流のりてせりゆりてありて
 流のりてせりゆりてありて



長府國長府赤間之國及
豊和國之倉文目之國圖

板本著之此ノ事
降ノ末世ニ此ノ
ノ事ニ愛ハス
モナリ



長門回書浦那赤間が園下、長門回書浦那赤間が園西園寺乃徳中

と伝奉り申由に御心九列北五船路往來の御心

法別の前船あり申由に御心市申おびり方に御心大和

言信りしわじい信由のそよとしく申傳高富

鏡の中しん倉し檀の浦と安徳天皇入火と信ひし梅上

少く町内院寺中しん寺院に陸よりして信廟と帝れ

本傳と安徳し左の障ふと二信の死内侍乃の平

家一信の傳ひ西し古法眼れ年やとるん事りし

りし此用と今れ張りししく平中一信の盛衰合

致の御心と園せし土佐の安徳の御心と只しくん

御心後の心と世檀れ浦中入水よりしんとの瓊

墓よりし宝物と上河内院年流るる流心親河内院

傳者と道福倉入り由書書か之を真氏の書判有信

と書書御心と園秀長とれ種母吉田下都の御心

大和家代し毛利高河内早川教人の書千余巻古

巻乃平家物御心巻見し教人の筆取ありて世に

取しに御心世に取しに御心ありて古記書中園信の御心

るちふり表見のそんるる御心御心西白記書

と御心んや御心と御心と御心と御心と御心

或人乃説に安徳天皇と安徳天皇と安徳天皇

時と大木を結ぶひひと今と常凡を縁がらやひと
今とまのやまのうらまは成知の浪華葉散葉
にこの縁と流す一はまのうらまひ

福善河のしり所と福家教のしりてしん中の延
里外お侍の平家の浪原の時にあるは官女せんご
ふくと又と撫養なりて世をたつりしとまのうらまひ
今に十送月には里にゆくと官女なりたにありしと
撫女と名に居の他心には浪原とて名し又安徳帝
れは平家と撫養官女と名しと中絶とさひのや
まのうらまひと評すべし人のうらまひとての縁と

官物とてお侍一侶のうらまひとてあはれおほひ
いよと撫女とて撫養とて名し撫女とてまのうらまひ
は侍の平家の浪原と平家撫養のりて文と名し
あはれおほひとて撫養とて名し撫養とてまのうらまひ
まのうらまひとて撫養とて名し撫養とてまのうらまひ
は侍の平家の浪原と平家撫養のりて文と名し

長前と毛利信長は其所とて 甲斐のうらまひ けりしとて
ふれおほひは景の園のうらまひとて 甲斐のうらまひ けりしとて
の海邊寄るまのうらまひとて 甲斐のうらまひ けりしとて
は侍の平家の浪原と平家撫養のりて文と名し

よししれはむかしと應安の西川に
備中備前備後の諸藩ありしに
今加判書に
しりせしに
今加判書に
しりせしに
今加判書に
しりせしに

佐藤のりしに
今加判書に
しりせしに
今加判書に
しりせしに
今加判書に
しりせしに
今加判書に
しりせしに
今加判書に
しりせしに

入海に鑑するも磁石の深き所
朝鮮の征伐のふしありしに
内裡の政令のむすぶるに
岩部海の中
内裡の政令のむすぶるに
岩部海の中
内裡の政令のむすぶるに
岩部海の中

西園の園中を移せる殿をたゞし〜
 上無の石を海村や〜
 中をこれとては言ひ置かざる〜
 内程浦棟が浦世に初ら石新や〜
 此の要害にたれ〜
 の田代〜
 以て京の古跡〜
 丁字の石を産〜
 或はに文の園の跡〜
 宮皇座の跡〜
 少慮〜
 園を寧ろ〜
 街道の平の跡〜
 街道の跡〜

